



2024 年 08 月 28 日
都留文科大学教養学部国際教育学科
専任講師 佐々木南実

DP 生が IB 教員を目指すワケ ～都留文科大学国際教育学科で IBEC 取得を目指す DP 修了生に聞きました～

都留文科大学国際教育学科で IB 教員を目指す、日本語 DP 修了生による座談会です。山梨県立甲府西高校 2023 年度卒業の青嶋紗英さん、市立札幌開成中等教育学校（‘23 卒）篠原宇翔さん、神奈川県立横浜国際高校（‘23 卒）玉置凌大さん、茗溪学園高等学校（‘21 卒）友部光さん（司会）。それぞれの IB 経験や IBEC（International Baccalaureate Educator Certificate）取得に向けた意気込みを語りました。写真の言葉は「こんな IB 先生になるぞ!」の一言です。

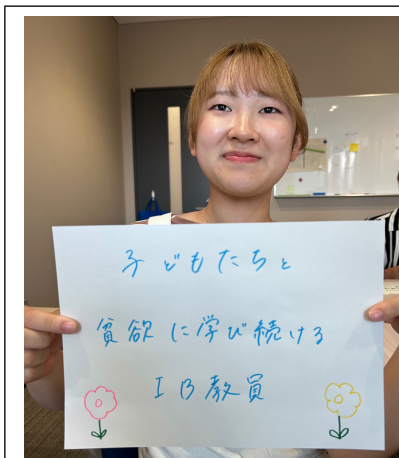


和気藹々と話は弾みました

1 IB との出会いは各者各様

友部「僕は、私立の併願校として考えていた学校に IB っていうプログラムがあることを知り、『これまでとは違う経験ができるかも』という予感がして IB 校に決めました。みんなの IB との出会いはどうでしたか?」

玉置「僕はインドのインターナショナルスクールで MYP を 1 年間学びました。MYP を通じて IB の勉強方法や教育にすごく興味が湧いて、これは自分にぴったりだと感じました。それで、帰国後も DP に進学しました。その勉強がめちゃくちゃ楽しいなって思えて、それを人に伝えたいっていうのが教員を目指したきっかけです。」



青嶋紗英さん

青嶋「私は高校入学後に IB を知りました。今までの教育とは全然違う印象で、DP の先輩が楽しそうに勉強しているのが素敵で、中 3 の担任の先生に話したら『そんな曖昧な気持ちじゃ DP は続かない』と言われ、逆に火が付きまして(笑)。DP を通じて自分自身、それまでは型にはまった考え方だったのがすごく自由になったと感じていて、IB 教員の道を選びました。」

篠原「僕は開成を受ける時も、DP に進む時も親の後押しがありました。でも、DP に進んでからは自分で考えて決断する力がついたと思います。大学は、自分の意志で都留文に進学することを決めました。最終的には自分の意思で決断できるようになったのは、DP の影響が大きいと思っています。」

友部「特に印象深い inquiry とかありますか?」

青嶋「甲府西の『総合的な探究の時間』は生徒全員にスーパーバイザーの先生がつき、リサーチ・クエスチョンを立てて探究課題に取り組みます。あと、DP 数学では音楽が大好きな友達がフィナボッチ数列をテーマに作曲していました。彼女は今、プロの音楽家として歩き始めています。」

篠原「札幌開成では、普通科コースでも希望者は TOK を取れますし、CAS は全校生徒でやるなど、結構 Open-ended な探究の機会が多かったんです。『校内を歩いて TOK question を探してくる』という課題で「学習者像のポスターで Open-minded の挿絵が、人の頭が開いてそこから人間が出てくるデザインになっている。これは心が頭の中にあるということなのか?」という意見が出て、それから心の場所についての議論が始まったのを覚えています。」

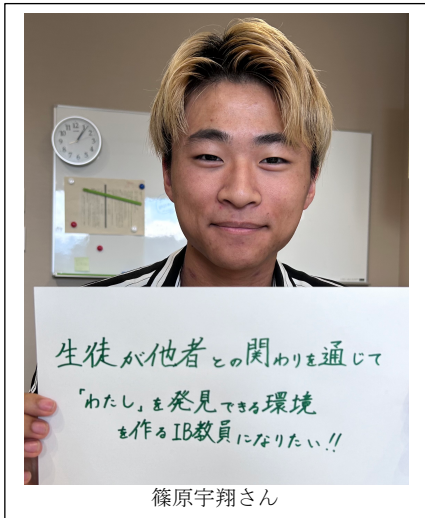


友部光さん

目指すのは「生徒の学びの深化をサポートする IB 教員」

2 私たちが期待する日本の IB の未来

友部「僕は IB 教員として日本の IB をこれから作って行くわけだけど、DP の未来って、どう見てますか？僕は、大学進学ツールとしての DP ってちょっと疑問を感じてしまうんだけど。」



篠原 宇翔さん

篠原「『DP は受験のひとつの武器として考えた方がいい』っていう言葉を聞いたことがあって、僕自身はその意見に「ん?」と思っていたほうだったので、今こうして DP を入試の手段として使うことに違和感を持っている人がいると知って、ちょっとウキウキしました(笑)。」

青嶋「最初に DP が『受験の切符』として宣伝されちゃったから、そう思う高校生が増えたのかもしれないですね。でも、『IB を使わずに一般入試で』ってなったときに、『テストどうしよう?』ってなるのが現実です。これは IB に変わってほしいというよりは、日本の受験システムに変わってほしいという意見ですね。」

篠原「つまり、DP は受験対策のための勉強とは少し違うというか。ただ、探究って言っても PYP、MYP と DP は目的が違うというのも事実で、DP では「教科」というより「学問領域」に踏み込んで行くと思うんで、そこを高校生自身が理解しないと辛くなっちゃうこともあるのかなとは思います。

MYP でベストフィットでやってきた生徒が、DP 入ると最終テストに直面するわけで。でも、点を取ることが目標で勉強しているわけではないって、どこかで高校生が気付くんです。僕自身も、文学の授業を通して自分自身と向き合うというか、内省を迫られた時が一番辛かった時期でした。今ではいい思い出ですが(笑)」

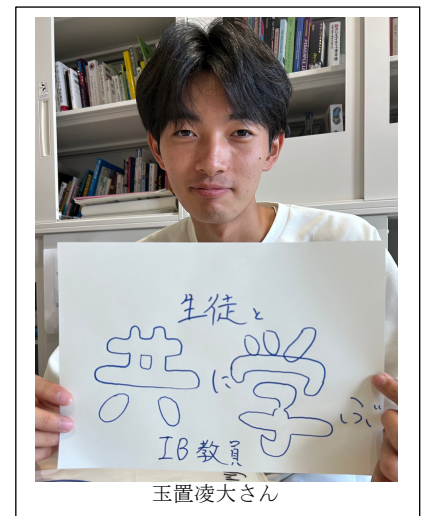
友部「高校生自身の気付きはもちろんの事、先生もそれをわかっている必要があるんだね。」

玉置「僕も少し似てて、言語と文学の HL がほんとにやばくて(笑)でも文学というものとテスト対策っていうものの結節点を自分自身でうまく見出すことができずにもがいて、過去問をずっとやってました。そしたら、最終的にはふっと得点が上がったんで、反復練習ではあったんだけど、その中に文学のエッセンスと、評価という行為を結びつける結節点があったのかなと。」

友部「なるほど。確かに DP のテスト対策は、自分の分析の視点を磨くことと同義だったりするね。そういう IB 的マインドを持った高校生がより自由に大学入試で羽ばたけるようにするためには、課題論文や内部評価の論文をプレゼンする試験が増えればいいのかもかもしれませんね。自分が目指す専門分野についてしっかりとアピールできるようになるんじゃないかな。IB と日本の大学入試のチューニングとしては、そんな取り組みに期待したいですね。」

青嶋「あと、これは自分の経験もなんですが、もし日本の学校の本格的な部活と DP を両立させるとしたら、それは本当に大変なんです。私は毎日練習のある吹奏楽を卒業までやって、大会出場も果たし、結果としてはタイム・マネジメントやその他いろんな面で成長できたので、やってよかったと今は言えるんですが。」

友部「部活以外にも高校生起業家とか、NPO 活動とか - 受験の話と関連させるのであれば、アピールしないと、みたいな風潮が強くなっている気もするので、その辺のバランスが取れたら、少し高校生も気持ちに楽になるかもしれない。そして、みんなも言うてくれたように内省する余裕ができるかもしれないですね。」



玉置 凌大さん

3 キーワードは Life-long learner と Communication

座談会の最後に、「どんな IB teacher になりたいか」を書いてもらいました。「生徒と共に学ぶ教師」「子どもたちと食欲に学び続ける教師」「生徒が他者との関わりを通じて『私』を発見できる環境を作る教師」「生徒の学びの深化をサポートする IB 教員」と、IB にとって重要なコンセプトである「生涯学習者」や「コミュニケーション」への意識が強く表れており、彼らの志が未来の IB 教育を明るく照らしていると感じられました。